

「生成」という観点からの 話法の再検討の試み

坂井厚子

- I. 問題提起
- II. 「間接化」をめぐる諸問題
- III. 「生成」という観点からの話法の再検討の試み
 - Aタイプの話法に分類できる場合
 - Bタイプの話法に分類できる場合
 - Cタイプの話法に分類できる場合
- IV. おわりに

I 問題提起

「話法」とは、一般に「他人（自分）の言ったことを引用する表現」（註1）と考えられている。従来、日本語の話法は西欧文法に習い、もとの発話者の言葉をそのまま伝える「直接話法」と引用者の立場から伝える「間接話法」に分けられる、とされてきた。文法的特色としては、直接話法の場合は聞き手目当ての陳述成分（終助詞、感動詞等）等が付加されるが、間接話法の場合はこれらが削除される、とされている。（註2）

では、次のような話法は直接話法だろうか。間接話法だろうか。

- ① 太郎は「明日、学校へ行くよ」と言った。
- ② 太郎は明日学校へ行くと言った。

日本語を母国語として習得してきた私たちは、①を直接話法、②を間接話法、と答えるだろう。何故であろうか。

①が直接話法である、と考えられる理由のひとつとして、まず、「 」がついていることがあげられよう。また、文末に終助詞「よ」が付加されているため、現場性があり、元の発話者の言葉があたかもそのまま再現されているかのように感じるのも理由としてあげられよう。これに対し、②では「 」がないこと、終助詞が削除されていることから、引用者が聞いたままでなく、引用者の立場から間接的に再現しているように感じるため、間接話法であると感じるのである。

しかし、もし、元の発話が③であるとすれば、①は直接話法といえるだろうか。

- ③ 明日、学校へ行くんだ

この場合、①は明らかに元の発話とは異なった形で再現されている。①は引用者によって修正されているにもかかわらず、助詞が付加され、場面性という性格を備えているのである。①は、「もとの発話をそのまま伝えておらず、引用者の立場から伝えている」という特徴からは間接話法、「聞き手目当ての陳述成分が付加される」という文法的特徴からは直接話法の特色を備えもつ。このように、もとの発話が忠実に再現されているわけではないが、聞き

手目当ての陳述成分などが付加され、あたかももとの発話そのまま再現されたかのように伝えられる話法は日本語には実際には多いのではないかといえる。例えば、次のような場合もこのような例として考えられよう。

④ 「昨日うちの女房が、そこへ行け、行けって言うから行ったんだよ。」

④は妻の言葉を夫が引用している例であるが、おそらくもとの発話は（下線部と同じである可能性もあるかもしれないが）、「そこへ行きなさいよ」「そこへいったら」のような、下線部とは異なった表現であろう。このように女性の発話が男性によって引用されるさい、女性言葉が男性言葉に変えられるなど、もとの発話が忠実に再現化されない場合は実際には多いのではないかと思う。

従来扱われてきた話法は「忠実に再現される」という前提のもとで直接話法、間接話法と分類がなされてきたといえるが、これまでみてきたように実際に「忠実に再現化が行われていないが、あたかも引用者がその場に居合わせたかのように生成される」話法も存在する。鎌田（1988）はこのような特色をもった話法を直接話法の一つとして分類しているが、引用者が「生成」していくという観点からみた場合、このタイプの話法は「もとの発話に忠実に再現化（生成）が行われた場合の話法」とは別のタイプに位置づけられる必要があるのではないかと考える。本稿ではこうした④のようなタイプの話法にも研究対象領域を広げ、引用者がもとの発話を生成していく、という立場にたって話法をとらえ直そうとするものである。尚、以下では、もとの発話者を第一の発話者、引用者を第二の発話者、とよぶことにする。

II. 「間接化」をめぐる諸問題

これまで話法の研究はもとの発話が第二の発話者によってどのように修正されるか、すなわち「直接話法」がどのような文法規則によって「間接話法」に変換されるか——いわゆる「間接化」という方向から——話法を研究する、という立場をとるものが多かった。

奥津（1967）は間接化について

間接引用文とは、直接引用文の内容を地の文の話し手の立場に翻訳した文であり、この手続きを間接化と呼ぼう。間接化によって直接引用文の発話の場は一次元引き下げられ、地の文に同化する。

と定義づけている。

仁田（1981）は、直接話法から間接話法への転換の規則として、

- ① 言語行為の類型を、直接的に決定する陳述成分や、聞き手目当ての陳述成分を取り除くか、あるいは変更する。
- ② 境遇性を示す語詞を、話し手の発話の場からみたものに変更する。
- ③ 丁寧体を普通体に変更する。

をあげている。

また、遠藤（1982）は、「間接化にはどのような文法規則が働き、また文法以外のどんな要素がどのように間接化に関与するか」という観点から、間接化の程度をさらに細かく観察し、下位分類を行なっている。遠藤は、日本語の話法を、もとの発話にもっとも忠実な話法であり、イントネーションも再現しようとする完全直接話法、伝達性の高い表現（感動詞など）から変換の行われる一般直接話法、引用文の視点を第一の話し手に残したまま、より簡

潔で文法的な形（会話でぬけがちなハ、ヲ、ガなどの付加）へと変換される修正直接話法、これまでの変換に加え、境遇性のある語句すべてを第二の発話の場に適当な語句に変換する一般間接話法に分けた。

これらの研究は、「間接化」という観点から、その過程において文法規則の変換という現象から話法をとらえるという立場をとるものである。確かにこのような観点から話法を整理した場合、学習者の立場からは有効であり、学びやすいといえる。が、話法そのものを現象としてとらえた場合、「間接化」というとらえ方には、いくつかの問題点があげられるのではないかと思う。

まず、「間接化」という現象は、もとの発話が忠実に再現化される、という一方向的な角度からとらえることが前提となっていることがあげられる。が、実際は前節でも述べた通り、もとの発話が必ずしも忠実に再現される方向ばかりではないといえる。第二の発話者が発話意図、状況などの影響をうけ、もとの発話に忠実ではない方向に再現しようとする場合もある。実際の話法はより複雑な方向性をもった現象であるといえよう。

また、「間接化」という現象は、「直接話法」が基準となり、そこから様々な操作を経て「間接話法」が導きだされる、とされているが、これはもとの発話内容を基準とした考えである、といえる。他人（自分）の言ったことを引用する表現、という本来の話法のもつ性格を考慮すれば、話法はむしろ、「引用者」が「主体的な行為」として、生成するという現象からとらえ直せるのではないかといえる。すなわち、第一の聞き手によって input されたもとの発話の意味内容が発話者の立場からどのように生成されていくのか、といった従来とは異なった視点から考察をすすめる必要性があるのではないかと考えるのである。つまり、「話法」を「生成」というダイナミックなプロセスとして観察した場合、第一の聞き手がもとの発話の意味内容を input し、発話者の立場から発話者の意図、発話の場などの影響をうけ、（あるいはうけずに）様々な形で生成していく現象としてとらえ直すことが可能ではないかと思うのである。もとの発話が input され、生成されていく方向は必ずしももとの発話と同じ形に生成される方向ばかりでなく、第二の発話の場や発話者の意図、聞き手の影響をうけた、より複雑な方向ももっているといえよう。

冒頭では、「忠実にもとの発話が再現されていないが、（陳述成分が付加されるなどして）あたかも引用者がその場に居合わせたかのように生成される」話法が、直・間接話法の二分類では困難である、ということについて述べた。しかし、第二の発話者による生成という観点からとらえ直した場合、こういったタイプの話法を「忠実に再現される」タイプの話法とは別の話法としてタイプづけることが可能ではないかと考える。

以下では、第二の発話者による生成という、従来とは異なった観点から日本語の話法を観察し、再検討を試みたい。（註3）

Ⅲ. 「生成」という観点からの話法の再検討の試み

「話法」とは「他人（自分）の言ったこと」を伝える伝え方である。これを第二の発話者の主体的な生成のプロセスとしてとらえると、どのような現象として説明できるだろうか。

例えば、A子がB男に「これ、食べるわよ」と発話したとする。B男はこの発話をきき、発話の意味内容を次のように input するであろう。

これを 食べる

(尚、ここで扱う“input”は、単なる音声の input でなく、聞き手が受信者としてもとの発話の意味内容を input する、という意味で用いる。したがって input された意味内容（メッセージ）は発話内容そのままの形式ではなく、もとの発話の意味内容には直接影響を与えない部分（例えば終助詞など）が削除される、等の操作が input する過程において行なわれたものとする。）

B男はこの input された意味内容をどのように生成し、C（第二の聞き手）に伝えるだろうか。

- a A子がこれを食べるといった。
- b A子がこれを食べるわよといった。
- c A子がこれを食うっていったよ。
- d A子（さん）がこれを召し上がるとおっしゃりましたよ。

a～dは、下線部の部分が異なった表現で生成されている。この違いはどのように説明できるであろうか。

まず、下線部の部分が、もとの発話の意味内容が input された状態とほぼ同じ状態で生成された場合と、生成される過程で input された状態のメッセージが何らかの操作をうけている場合に分けられる。前者はa、後者はc～dにあてはめることができよう。

aは、もとの発話の意味内容が input された状態とほぼ同じ状態のまま、生成されている。すなわち、input されたもとの発話の意味内容が、第二の発話の場や発話者の意図などの影響をうけた操作がなされて変えられることなく、input する立場から、（すなわち第一の聞き手としての立場から）生成されているタイプであるといえる。このようなタイプの話法をAタイプの話法と名づけておくことにする。

次に、bであるが、下線部「食べるわよ」はもとの発話と同じ形である。すなわち、第一の聞き手が第一の発話者に立場を変換しもとの発話の場（第一の発話の場）と同じ発話の場を新たに生成するという操作を行なっている。このように、第一の発話の場と同じ発話の場が新たに生成される操作の行われるタイプの話法をBタイプの話法と名づけることにする。

Bタイプの話法は、第一の発話の場と同じ発話の場が生成されるための操作が行われ、もとの発話が忠実に再現されているが、生成の方向は必ずしもこの方向ばかりとは限らない。c、dはもとの発話を忠実に再現する方向とは異なった方向に生成が行われているといえる。すなわち、もとの発話を忠実に再現しない形で、第二の発話者の立場から新たに生成されたケースといってよいだろう。cはもとの発話が女性言葉であるのを第二の発話者（男性）の立場から、男性言葉に変換し、生成しているケースである。これはinputされたもとの発話の意味内容を第二の発話者の立場から、第二の発話の場の影響を受け、男性言葉にスタイルを変換するという操作を行なっているためである。すなわち、第一の聞き手が第二の発話者に立場を変換し、第一の発話の場とは異なった新たな発話の場がつけられているといえる。dでは、第二の発話者の立場からみて、Aが目上であるということが考慮され、生成されているが、これもcと同じタイプといえよう。c、dのように第二の発話者の立場から、第二の発話の場や第二の発話者の立場、意図などの影響を受け、第一の発話の場とは異なった発話の場が新たにつくられる操作がなされ、生成される話法をCタイプの話法、と名づけるこ

とにする。

尚、ここで留意したいのは、第一の聞き手と第二の発話者は同一人物であるが、異なった立場としてとり扱う、ということである。第一の聞き手の立場はもとの発話の意味内容をinputする立場であり、第二の発話者の立場は、第二の発話の場などの影響をうけ、inputされたメッセージに操作を加え、新たな発話の場をつくりだすという立場である。本稿ではこの2つの立場を異なったものとしてとり扱う立場をとる。

以上、「生成」という観点から、話法をinputされたもとの発話の意味内容（メッセージ）が発話の場などの影響をうけた操作がなされることなく、第一の聞き手の立場から生成されるAタイプ、inputされたメッセージが第一の発話者の立場から操作され、第一の発話の場と同じ発話の場が新たに生成されるBタイプ、第二の発話者の立場から操作され、第一の発話の場とは異なる新たな発話の場が生成されるCタイプに分類した。これらをまとめ、図式化すると次のようになる。

（尚、本稿ではinputされたもとの発話の意味内容（メッセージ）がどのように生成されていくか、ということに焦点をおいて話法の体系づけを試みている。inputされる過程の操作については今後稿を改めて検討したい。）

表 1

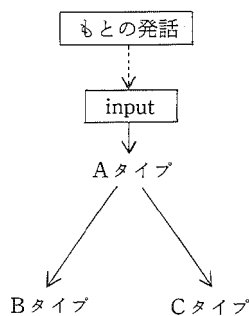


図 1

タイプ	基準とする立場	inputされた意味内容（メッセージ）に対して	新たな発話の場の生成
A	第一の聞き手	操作なし	なし
B	第一の発話者	操作あり	あり 〔第一の発話の場と同じ〕
C	第二の発話者	操作あり	あり 〔第一の発話の場と異なる〕

以下では、この3つのタイプに分類することが可能なケースを検討しつつ、それぞれの話法にみられる特色をみていきたい。分類については解釈上、別のタイプにも分類できる場合がみられる。ここでは主にそれぞれのタイプの特徴が表われていると考えられるケースを中心に用例を集めた。尚、用例は小説やシナリオ等からとった。もとの発話に相当する部分は~~~~、生成されている部分は——で記す。

Aタイプの話法に分類できる場合

この話法は、第一の聞き手にinputされたもとの発話の意味内容が、inputされた状態にほぼ近い形で生成された話法である。生成の過程において、新たな発話の場をつくりだす等の操作が行われていないのが他のタイプの話法と異なる点である。

⑤ A「映画、みにいこうぜ。」

B「Aさんが映画みにいこうっていったよ。」

- ⑥ 「私、わるいけど、よすわ。」
 「よすなんていわないでよ。」 (ふ 28)
- ⑦ 「なんで、そんなこと頼むんだい？」
 トットは、教わった通りに答えた。
 「だって、これ踏まれてると、私の顔がつぶれて写るってききましたから。」
 (中略)

この間、カメラのアシスタントの男の子が、ケーブルを指して、
 「これ、踏むと顔がつぶれて写るよ!」とトットに言った。 (ト 188)

⑥、⑦は生成部分に終助詞(ぜ、ワ、ヨなど)が付加されていないケースであるが、これらは発話の意味内容そのものに影響を与えないため、もとの発話の意味内容がinputされる時点で削除され、その状態で生成されたためと考えられるだろう。

また、一口にinputされた状態にほぼ近い形といっても様々な形が考えられる。次のような例もAタイプの話法として考えられるだろう。

- ⑧ A「新しくオープンした店はどんなところでしたか?」
 B「新しくオープンした店はどんなところだったかってAさんがきいていましたよ。」
- ⑨ 金齒「お線香、あげさせてもらえますか。」
 さと子「お線香、あげさせてくださいって。」
 (あ 224)

⑧、⑨はもとの発話の意味内容に影響を与えない丁寧体や、やりもらいの表現が削除されたままinputされ、付加されない形で生成されたケース、と考えられよう。

- ⑩ 佐竹「門で受付やって来い。」
 実「受付やれとは何だ。」 (ふ 25)
- ⑪ たみ「へそくり? そんなもの、ありませんよ。」
 仙吉「無いわけないだろう。お前ほどの女が、へそくりないなんて、そんなバカなことがあるか。」
- ⑫ 仙吉「よせ! 縁起でもないこと言うな。」
 仙吉「縁起の悪いこと言うなって言っているだろう。」
 (あ 167)

⑩～⑫は、もとの発話内容がinputされる時点で(発話内容は簡略化されるが)意味内容はかえずに行なわれ、生成する過程ではその状態に操作が加えられず行われたもの、とみてよいだろう。

また、Aタイプの話法は次のようにinputされた情報が間接的であり、新たな発話の場を生成するほど聞き手がその情報に対して確信を抱いていない場合にも用いられる。

- ⑬ 「あいつは、おまえのことを何となくはっきりしない女だと言ったかもしれないが…」
 (か 69)

⑬では、引用動詞に「かもしれない」という表現が用いられているが、これはinputされた情報の不確定さを示しているものであるといえよう。⑬は、inputされたメッセージに、新たな発話の場を生成し場面性をもたせないことによって第一の聞き手の情報に対する確信度の低さを示しているといえる。

以上、Aタイプの話法について検討した。Aタイプの話法には、やりもらい、丁寧体、終助詞など削除されたまま input され、付加されない形で生成されるケースや、より簡潔に言いかえられる等のケースが分類可能であるといえるが、いずれももとの発話の意味内容には影響していない部分であるといえる。また、Aタイプの生成部分には場面性がないが、これは新たな発話の場をつくりだすという操作がなされていないためといえよう。

Bタイプの話法に分類できる場合

このタイプの話法は、第一の聞き手によって input されたもとの発話の意味内容が、第一の聞き手が第一の話者に立場を変換し、第一の発話の場と同じ発話の場をつくりだすという過程で操作され、生成される話法である。新たな発話の場がつけられる操作が行なわれる、という点ではCタイプの話法と類似しているが、第一の発話の場と同じ発話の場がつけられる、という点で異なっている。(第一の発話の場と同じ発話の場をつくるとはいってもイントネーション、アクセント等の音声的要素はとり除くものとする。) また、Aタイプの話法とB、Cタイプの話法の最も大きな違いは、Aタイプの話法では、input された意味内容(メッセージ)がほとんど変えられずに第一の聞き手の立場から伝えられ、新たな発話の場がつけられるという操作が行なわれていないのに対し、B、Cタイプの話法では、第二の話者の立場に立場を変換し、新たな発話の場がつけられだされるという操作が行なわれていることであろう。したがって、Bタイプの話法はCタイプの話法と同様、場面性を明確にだす形で生成されている。

⑭ 禮子(声)「ごめん下さい。」

さと子の声「だれかしら。うちのお客でごめんください、としっぽを長くひっぱる人、いたかしら。」 (あ 112)

⑮ 「やーだ。」

とトットがいったら、衣裳さんの中で一番偉い、石井チャンという女の衣裳さんにどなられた。

「なが「やーだ」だよ。間に合わない方が、よっぽど「やーだ」だよ。」 (ト 211)

⑭、⑮はもとの発話の意味内容は「ごめん下さい」「やだ」と input された、と考えることができる。しかし、発話を生成する時点で第一の発話者の立場から、第一の発話の場と同じ発話の場を生成するという意図的な操作を加えることによって、第一の発話者の発話内容ばかりでなく、第一の発話者の特徴や場面をリアルに描きだそうとしていると考えられるのである。

次のように男性が女性の言葉(あるいはその逆)を生成する場合も、input されたメッセージに操作が加えられている例であるといえよう。

⑯ 「それに、あの人、家族のことを何も話さないんです。両親は死んだ、妹がひとり、昔、庭に池のある家に住んでいたのってそればかりだからね。」 (か 146)

⑰ 「私はもう疲れきっていたから、どんなに叱られても、暫くそこで休んでいこうと思っていたの。そしたらマイクが又、『こら、聞えねえか! 生簀こわしたら弁償してもらうからな』って言っているのが聞こえたの。」 (生 50)

⑯はもとの発話者が女性であることを男性が、⑰はもとの発話者が男性であることを女性が生

成したものである。女性が男性言葉を、男性が女性言葉を生成するのは不自然であり、かなり意図的に操作を加えていると考えてよいであろう。あえて第一の発話者の立場から、このようにもとの発話を忠実に再現しようとした理由は、⑭、⑮と同様、もとの発話者の特徴や場面をリアルに描きだそうとする第二の発話者の意図があるためといえよう。

次の例は第一の発話者の立場に完全に変換が行われたケースであるといえよう。

- ⑬ 実 「自分の特色を最大に生かして、目標を定めてガンガンやってかなきゃ、一生バイトだよ。(と係員の口真似をする)」 (ふ 385)

また、境遇詞や方向動詞が第一の発話者の立場から生成されている、という点でBタイプの話法に分類されるという見方ができる例もある。

- ⑭ 「あの時はいらしたの？」

品子は いぶかしそうにきいた。

「ただ、こっちへいらっしやいとだけで、お電話がすぐ切れたの」 (舞 254)

⑭の下線部は、第一の発話者を基準とした境遇詞、方向動詞が使われているという点で、Bタイプの話法の性格をもつといえる。

以上、用例を検討しつつ、Bタイプの話法にみられる特色をみた。(註4)

Bタイプの話法では、第一の聞き手がinputしたメッセージを、第一の発話者という立場から操作し、第一の発話の場と同じ新たな発話の場をつくりだしているため、こういった操作の行われぬAタイプの話法より、より複雑なタイプであるといえる。従来、Aタイプの話法は「間接話法」、Bタイプの話法は「直接話法」、と分類され、直接話法より間接話法の方が「間接化」という操作を経ているため複雑である、とされてきた。しかし、「生成」という観点からみた場合、逆であるといえることができる。また、Bタイプの話法は第一の発話の場と同じ新たな発話の場を生成するため、inputされたメッセージは場面性をもつ形に変換されている。発話内容ばかりでなく、第一の発話者の特徴、発話の場がリアルに描きだされているのもそのためといえよう。

Cタイプの話法に分類できる場合

Cタイプの話法は、第一の聞き手によってinputされたもとの発話の意味内容(メッセージ)が、第一の聞き手が第二の発話者に立場を変換し、第二の発話者の意図、発話の場などの影響を受け、第一の発話の場とは異なる新たな発話の場をつくりだすという操作を経て生成される話法である。Bタイプの話法と異なる点は新たに作りだされる発話の場が第一の発話の場とは異なった新たな発話の場である、という点であろう。そして、新たな発話の場が生成されるさい、第二の発話者の立場や意図、第二の発話の場や第二の聞き手の立場が影響を与えている。以下では、それぞれの場合について、検討してみたい。

まず、生成されるさい、第二の発話者の立場の影響を受けている場合をみてみたい。

- ⑯ A 明日、姉がそちらに行くよ。

B 明日、Aさんのお姉さんがこちらに来るって言っていたよ。

Bの発話では、境遇詞が第二の発話者(B)の立場を基準としたものに交換されている。

⑯の例も同様のケースといえよう。

- ⑰ 「そう。じゃ、ぼく虻田に住むことにする。あなたも一緒に来てくれる?」

安彦の言葉に、わたしも驚いた。

「わたしも行くの？」

(道 90)

次のように、第二の発話者の立場を基準とした敬語が使われる操作がされる場合もある。

② A 明日、会議に出席いたします。

B Aさんが明日、会議に出席なさるっておっしゃってましたよ。

AがBよりも目上の場合、このようにBはBの立場を基準とした尊敬語を使うような操作を行なっている。

③ 「角さんもかい。」

「いいえ。角さんは日曜だけれど、新聞の対談の司会をなさるんですって。」

(天 63)

敬語を使う操作がなされる場合、第二の発話者の立場を基準にして、もとの発話者が目上である場合、第二の聞き手が目上である場合、両方が目上である場合が考えられる。②はいずれにもとれるであろう。

次に、第二の発話の場の影響をうけ、スタイルの変換などの操作をうける場合をみたい。

④ 「こいつったら、イカがうまいうまいって、俺の分まで食っちゃってさ、あとの言い草だけはしおらしいんだ。こんなうまいもん姉ちゃんにも食わせたいとさ。」 (旅 114)

④はもとの発話者は女性であるが、もとの発話者が下線部そのまま考える人はまずいないであろう。男性が第二の発話者の立場から、もとの発話を男性言葉に変換して生成しているのである。第二の発話の場の影響をうけた変換の行われる場合は、次のような方言の例にもみられるといえよう。

⑤ A 「これ、おいしいね」

B 「Aさんがこれおいしいだっていっていたよ」

⑤は、第一の発話者が方言話者でなかったのを、第二の発話者が方言に変換しているケースである。⑥の場合、もとの発話者(息子)が下線部の部分をもとの発話では方言で話さなかったと考えた場合には変換が行われるため、Cタイプの話法ということがいえよう。

⑥ 「息子は、山田さんの視力検査をしたと言うておりました。眼鏡の注文ば、受けた言うて。」 (天 63)

また、⑦は第二の発話の場の影響をうけ、もとの発話がらんぼう体に変換されたケースと考えられるだろう。

⑦ 泰治「中学高校大学と、お前の顔色ばかり見て来たんだ。さからっちゃいけねえ、叱っちゃいけねえって、みんなでいろんなこといいやがって、お前はつけ上がって、登校拒否だの、暴力だの、いい気になって親おどろかして、こっちはハラハラハラ…」 (ふ 377)

⑦の下線部分は、⑧のようにinputされた状態で生成されるAタイプの場合に比べ、場面性があり、また、下線部以外もらんぼう体であるため、⑧に比べ、適切で自然な形で生成されているといえよう。

⑧ 「中学高校大学と、お前の顔色ばかり見てきたんだ。さからっちゃいけねえ、叱っちゃいけねえってみんなでいろいろなこといいやがって、お前はつけあがって、……」

⑧の下線部分は逆に、やわらかい文体の影響をうけているケースであると考えられる。

⑨ 「だから、つきつめていえば、笑いというのは差別感みたいなもんだから、知ってなき

や笑えないよっていうのさ、ちょっと前までだったら制作者のおごり高ぶりで、テレビというマスメディアでは許されない論理だったと思うんだけど、それをやってみたら思ってるよりけっこうみんなついてくるじゃないというのが率直な感想ですね。」 (笑 18)

⑳の例は、第二の発話の場がやわらかい口語体でかかれてあり、このスタイルの影響を受け、生成部分もやわらかい口語体で生成されたケースと考えることができる。Bタイプの話法では、第一の発話の場と同じ発話の場を生成するために終助詞「よ」などが付加されるケースをみたが、このように第二の発話の場の影響をうけて付加されるケースも存在するといえよう。

また、生成されるさい、第二の発話者の意図により、次のように強調される形で生成されたと考えられる場合もある。

例えば、AがBに「ピアノを弾いて下さい」と何度も頼んだとする。Bは何度も頼まれた、ということ強調するために、次のように生成するであろう。

㉑ 「Aさんが私にピアノを弾け弾け、というんだよ。」

㉑は必ずしももとの発話がくり返して発話されたわけではないと考えられる。Bが第二の発話者の意図により、くり返すことによって強調し、第二の聞き手に伝えたケースと考えられよう。㉑の場合も、同様のケースといえよう。

㉒ 「電車やバスの中でお年寄や赤ん坊連れの人に『どうぞ、どうぞ』なんちゅうて席をゆずるやつがおるやろ。わし、どうもあれ気に入くわんのや。というより、照れくさそうてようできん。席をゆずるといふ行為、つまりやさしさな。これはいい。これはいいんだが、たかが席やないか。それを、これみよがしに『どうぞ、どうぞ』なんていうこたないですよ。」

(天 224)

㉒ではもとの発話がそのまま生成されているBタイプの話法、ととることも可能であるが、もとの発話を第二の話者が強調するという意図で、くり返した形で生成している、と考えることも可能であろう。

以上、生成されるさいに第二の発話者の立場の影響をうける場合、第二の発話の場の影響をうける場合、及び第二の発話者の意図の影響をうける場合の例をみたが、Cタイプの話法にはこの他に、第二の発話者が、第二の聞き手(の立場)の影響をうけ、(あるいは第二の聞き手の立場を考慮し)生成を行っている場合がある。

㉓ A 「集合しなさい。」

B 「Aさんが集まりなさいっていったよ。」

㉓は、第二の聞き手が例えば幼児などで、「集合する」という語の意味が理解できないと第二の発話者が考えた場合、こういった聞き手の立場を考慮し、易しい語におきかえたケースと考えられよう。

また、次のように第二の聞き手が第二の発話者の立場からみて目上の場合、敬語が使われるよう操作がなされた、と考えられる場合もある。

㉔ A 「入って下さい」

B 「Aさんがお入り下さいっておっしゃっていました」

これは、B(第二の発話者)に対して第二の聞き手が目上であることをBが考慮し、より丁寧ない方に変換されているケースといえるだろう。㉔はもとの発話者イコール第二の聞

き手である場合だが、③④も同じケースとみてよいだろう。

③④ 「そう？ この間、沼田さんに聞いたが、お母さまも春に発表会をなさるんだって？」
(舞 222)

③⑤も聞き手の立場を考慮し、第二の発話者の立場から操作が行われたケースと考えられよう。

③⑤ A→Bに「もう帰ってこないのか？何かあったの？」
B→Cに「帰っておいでって」 (か 68)

AはBに、電話でCの行動についてたずねている。(CはBと同じ場におり、CはAの発話をきいていない) Bは、Aの発話内容を、Cの立場を考慮した内容に操作した、と考えられよう。

③⑤の例はもとの発話内容を第二の聞き手がほぼすべて理解しているであろうということを第二の発話者が考慮し、もとの発話よりより簡潔な形で生成されているケースと考えられる。

③⑥ 「直しちゃ、いけません。あなたの、そのしゃべり方がいいんですから。へんじゃありません。いいですか？直すんじゃないありません。いいですか？直すんじゃないありませんよ。そのままいて下さい。それがあなたの個性で、それが僕たちに必要なんですから。大丈夫！心配しないで。」

「あなたの、そのままがいいんです」

という、飯沢先生に逢わなかったら、恐らく放送界に残ることはなかったにちがいない。

(ト 198)

③⑥は、第二の発話者が既にもとの発話に関する情報をもっていることを第二の発話者が考慮し、より簡潔な形で生成したケースであるが、③⑦はその逆であると考えられよう。

③⑦ A：「疲れたなあ」

B：「Aさんが、昨日山に登って疲れたって言ってたよ」

③⑦では、第二の聞き手が、Aの疲れた理由を知らない、ということを第二の発話者(B)が考慮し、生成する過程で理由を補足するという操作を行なっているケースと考えられよう。このように、第二の聞き手の不足していると思われる情報を、第二の発話者が補う形で生成する場合もCタイプの話法として分類できよう。

以上、Cタイプの話法を、第二の発話者が新たな発話の場を生成するさいの操作を加える要因—第二の発話者の立場、第二の発話の場、第二の発話者の意図、第二の聞き手の立場—に分けて、検討した。実際の日本語の話法では、Bタイプのように忠実にもとの発話を再現する話法よりも、むしろCタイプのように、第二の発話の場や第二の発話者の意図、第二の聞き手の立場などの影響をうけ、もとの発話とは異なった形で生成される話法はかなり多いのではないと思われる。これは、日本語が発話の場や聞き手の立場の影響をうけやすい言語であることを示していることにもなると思う。こうした特徴をふまえて、Cタイプの話法をさらに深く検討していく必要があると思われる。

IV. おわりに

従来、日本語の話法は西欧文法に習い、直接話法、間接話法の二分類を前提とし、分類されてきた。しかし、発話の場や聞き手の立場の影響を受けやすいという日本語の特徴を考慮

した立場からの話法の再検討が必要ではないかと考える。今回はこうした点を考慮に入れ、「生成」という観点からの話法の再検討を試みた。今回の試みは「第二の発話者」すなわち「生成者」の立場を中心に話法を再検討したものであるが、今後検討しなければならない問題点もいくつか残されている。まず、もとの発話の意味内容がinputされる過程の操作についての検討が不十分であること、そして実際の話法には中間のタイプや混合タイプも多く、分類の方法、操作の要因などCタイプの話法を中心にさらに検討する必要がある点などである。また、今回は実際に発話がなされた場合のみ対象となったが、実際に発話がなされなかった場合（註5）や、例えば動物の鳴き声を扱った場合（註6）などを話法の領域に含めるか、もし含めるとしたらどのようにタイプづけされるか、等も検討課題として残されている。今後このような問題についても検討を続けていきたいと思う。拙稿について御指摘、御批判いただければ幸いである。

（付記）

小論をまとめるにあたり、筑波大学の砂川有里子先生はじめ、研究会等でいろいろな方に貴重な御指摘を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 小矢野 『日本語教育事典』
- 2) 仁田 「話法」『日本文法事典』
- 3) 「話法」の領域には思考活動を含む立場をとる研究もあるが、今回本稿でとり扱う領域には、言語活動を行う場合のみとする。また、実際に発話が行われなかった場合（彼女だったらおそらく、「ぜひやりましょう」というに違いない、等）は除くものとする。
- 4) 次のような「聞き返し」や「単なる音声のみの模倣」もBタイプの話法に分類できるという見方もあるかもしれないが、もとの発話の意味内容がinputされ、第一の聞き手が第二の発話者に立場を変換し、新たな発話の場をつくるという操作が加わっていないため、今回の分類に関しては対象外とした。
 - a 「この人は、警視庁の警部さんです。今日、何かあるといけないんで、来てもらったんです。」
「何かあるとって？」 (ゆ 146)
 - b 初太郎「ト、トラ」
たみ「トラの帽子？」
仙吉「馬鹿！虎の皮はフンドシだよ。何言ってるんだ。」
たみ「おじいちゃん、トラって？」
初太郎「トランク」 (あ 165)
- 5) 次のような例が考えられよう。
哲生に救ってほしかった。いつものように、楽しくふるまって、そのまっすぐな瞳や確信に満ちた言い方で、「そんなことはどうでもいいことだ。忘れてしまえ。」と言ってほしかった。 (か 51)
- 6) 例えば、次のような例があげられる。
 - a 「どうしたんだ」
「畑でミケが鳴きまして」
「何だ？」
「ここ掘れワンワン——いやニャンニャンってわけで。…」 (ゆ 202)

これは動物の鳴き声を聞き手が人間の発話と同様に解釈したケースである。このような例は多くみられるが、今後どのように位置づけていくか検討が必要だろう。

参 考 文 献

- 遠藤裕子 1982, 「日本語の話法」『月刊言語』, 11-3
 奥津敬一郎 1968, 「引用句構造と間接化転形」『言語研究』, 56号
 オリビエ・ビルマン 1988, 「間接話法の日仏比較対照」『日本語学』, 7-9
 鎌田 修 1983, 「日本語の間接話法」『月刊言語』, 12-9
 ——— 1988, 「日本語の伝達表現」『日本語学』, 7-9
 神尾昭雄 1990, 『情報のなわばり理論』, 大修館
 小泉 保 1990, 『言外の言語学』, 三省堂
 砂川有里子 1987, 「引用文の構造と機能——引用文の3つの類型について——」『文芸言語研究 (言語篇)』13号, 筑波大学文芸・言語学系
 ——— 1988, 「引用文の構造と機能(その2)——引用句と名詞句をめぐって——」『文芸言語研究 (言語篇)』14号, 筑波大学文芸・言語学系
 ——— 1988, 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9
 ——— 1989, 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』, 明治書院
 寺村秀夫 1979, 『日本語の文法』(下), 国立国語研究所
 中川ゆき子 1983, 『自由間接話法』京都あぼろん社
 成田義光 1987, 「日英語話法の比較」『日本語・日本文化研究論集』, 大阪大学文学部
 仁田義雄 1981, 「話法」『日本文法事典』, 有精堂
 廣瀬幸生 1988, 「言語表現のレベルと話法」『日本語学』, 7-9
 藤田保幸 1985, 「内的引用」における話法の転換について——話法転換のa線——」『語文』第46輯, 大阪大学文学部
 ——— 1986, 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する——引用論の前提として——」『論集日本語研究(現代編)』明治書院
 ——— 1987, 「『疑う』ということ——『引用』の視点から——」『日本語学』, 6-11
 ——— 1988, 「『引用』論の視界」『日本語学』, 7-9
 三上 章 1972, 『現代語法序説』, くろしお出版
 森山卓郎 1988, 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院
 『国語学辞典』 国語学会
 『日本語教育事典』 日本語教育学会

用 例 出 典

- (あ) 『あ・うん』 向田邦子 新潮文庫
 (生) 『生命ある限り』(上) 曾野綾子 新潮文庫
 (旅) 『旅路』(上) 平岩弓枝 角川文庫
 (天) 『天使』 遠藤周作 角川文庫
 (ト) 『トットチャンネル』 黒柳徹子 新潮文庫
 (ふ) 『ふぞろいの林檎たち』 山田太一 新潮文庫
 (舞) 『舞姫』 川端康成 新潮文庫
 (道) 『道ありき』 三浦綾子 新潮文庫
 (ゆ) 『幽霊記念日』 赤川次郎 文芸春秋

(笑) 『笑いの構造』山藤章二 講談社文庫

(か) 『哀しい予感』吉本ばなな 角川文庫

小論執筆中に、紀要委員長の豊国秀夫先生が急逝されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。